

## 人生 100 歳の社会に暮らす ～露呈する多様な課題解決に向けて～

[ソーシャルマーケティングプロデューサー 澤登信子]

Japa メルマガ“イノベーション×地方創生”2020 年 7 月 1 日 #04 に記載

今、私たちは人生 100 年の社会に暮らしている。

舞台に例えれば、一幕は、誕生から親になるまで。20 代後半から 30 代半ば迄。

親になると、二幕目が始まる。仕事を持ち、男性と女性の役割分担を否応無に担うようになる。男女均等社会になって久しく、女性も仕事場では活躍できる環境ではあるが、暮らしの現場では、女性に負担が重いのが現実であろう。

男性の意識も大いに変わり、子育てに携わる人も多いが個人差が大きい。女性達は「家事」「子育て」「介護」に携わり、求める男性像としてそれらに積極的に担う男性を選択する。男性評価に「優しそうだから」を掲げる人が多いのは、こうした生活全般を俯瞰して見ているからである。

三幕目は、これまで「老後」と称されていたステージを指す。「生涯現役」のライフスタイルを目指す都市住民も多いが、長くなった時間をもて持て余す高齢者の「新たな課題」が露呈している。長寿を喜ばず不安や不満を抱いている。様々な重い生活課題が絡み合った社会課題をどう紐解けば良いのであろうか。

同時に、従来の「標準家庭」としてきた親と子供が共に暮らす「家庭像」は、最早、基準ではなく、「少数家庭」が増加し、その姿も多様である。支え合う関係の「家族」を失った「少数家庭」、生活の足元が揺れ動く「高齢者世帯」の増加は社会の崩壊に繋がっていきこう。

この解決に向けて、私は生活者の視点から、「社会貢献」を理念として「仕事」と「住まい」の有り方を見直せば「活力」が個々人から湧出してくると確信する。夫々が培った多様な資源を持ち寄れば幾重にも広がる輪が形成されていく。これまでの「速さ、大きさ、量」を求めていた都市住民の価値感から、互いに支え合える「互助」の関係を基本とした考え方に変える必要性を私は感じる。

「個人社会」から「互助社会」へ、「直線文化」から「曲線文化」へ。「母性文化」をベースとし、男性は「ナイト」に徹し女性達の考えを「カタチ」にする。そうした社会・文化・人々が繋がる「場」として「住まい」の見直しが急務となっている。

21 世紀の「家」は、「シェアハウス」や「人々のたまり場」機能としての「新しいカタチ」が求められる。同時に、様々な人やモノを繋げる横糸を織り成す「人」が重要である。社会に眠っている多様な資源を活かす時代が到来している。

「新たな公」として、「自助・共助・公助」の「仕組みづくり」が問われている。